不定期刊行　　第 520 号　2014.08.24

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

## 飯田高校夏山縦走　（杉山昭久先生より情報提供）

我が飯田高校山岳班も 8/2 から 8/6 日の 4 泊 5 日で、南ア南部縦走行って来ました。当初この期間晴れの予想は全く外れ、1 日目 2 日目（小河内）までは良かったものの、荒川・赤石・兎・聖等々３０００ｍピークは、台風 12 号の影響でガス・霧雨・強風。大変でした。生徒は素晴らしい景色を見ることもなく、長いときで 10 時間のお稼ぎ。

しかし、良い体験になったかと思われます。相変わらず荒川カール（夏道）には鹿よけのネットが張られ、ゲートを開けたり閉めたりの下りでしたが 、ネットの中のお花畑は、見事に復活。クロユリ・ハクサイチゲ・ミヤマキンポーゲ・ハクサンチドリ等々の植物大群落がそれはそれは見事でありました。西沢渡上部１４００ｍ地点、やせ尾根が大木倒れ、一部登山道破壊。危険でありました。盆明け、北又渡から奥、易老渡・便りガ島までが土砂崩落のため、当分の間、通行止めとのことです。（飯田高校　杉山）

## 山岳図書資料館へ寄贈していただきました（京都田中健一先生）

インターハイの時、以前お願いしたことを覚えてくださっていた京都の田中さんから「大町の山岳図書資料館へ寄贈してください」と、３冊の報告書をお預かりした。３冊はいずれも田中さん自身が参加した遠征の記録。興味深い内容なので、ちょっと紹介。

１、ＰＫ6885 登山報告書（京都府高等学校登山部顧問団カラコルム登山隊）　1983 年に行われた京都府の高校登山部顧問団による西カラコルム 6885m峰への登山報告書。残念ながら登頂は叶わず 6260ｍで断念したとのことだが、登山のみならず各自がテーマを定めて調査したことも報告されており、その点でも面白い報告書だった。山はすっきりとした鋭鋒で登攀意欲のそそられる姿であった。この遠征に先立つこと 7 年、京都府山岳部顧問団はパキスタン北部へ入域しており、そのメンバーがこの登山隊の主力メンバーともなったとのこと。熱い時代だった当時が彷彿とされる。

２、長白山報告書（1988 京都長白山登山隊）　1988 年労山を基本にした長白山の冬季遠征の記録。吉林省の開放政策もあって、当時入山しにくかった長白山へのモデルケースとして、貴重な報告となっている。今でこそ観光事業の拠点として、多くの観光客も訪れる長白山だが、開放前のしかも冬季（12 月）の登山の記録は興味深かった。

３、京都高等学校登山部顧問団モンゴル登山隊’92 報告書　京都の高体連登山部顧問によるアルタイ山脈ムンハイルハン山群での合宿と調査。連続で周囲の 4000m級の山 4 座を目指すスタイルはまるで涸沢合宿の記録をよんでいるかのように思えた。中に、島根の高体連隊（岡崎秀紀隊長）が同じ年にこの山域に入山しているという記述もあった。1992 年といえば、長野県でも青海省で第 3 回高校生訪中卯登山交流会が行われた年。僕自身もその前年に第 2 回隊で、青海に行った。高校山岳部に活力のあったこの時代のことがよみがえって来る。

＊山岳図書資料館（かわらばん 449 号を参照ください）では、随時図書資料を受け入れ

ています。他県でもこのような高校・また高校山岳部関係の貴重な資料、報告書などで提供いただけるものがありましたら、大西までご連絡いただければありがたいです。

## 全国山岳部指導者・生徒アンケート実施中

6 月に大町で鹿屋体育大学の山本正嘉先生と話をしているとき、高校山岳部の現状について話題になった。若い世代の登山者の実態というのは、これまで組織的になされたことはない。そこで、実態がどのようになっているかを調べることで、いろいろな部分に役立てることができるのではないかということで話が盛り上がった。たまたま、小生が全国高体連登山専門部の副部長をおおせつかっていることもあり、その立場から早速全国高体連事務局と副部長に相談をしたところ、高体連でもそのような調査なら大いに協力しようではないかということになった。中身については山本先生にたたき台を作成していただき、それを小生が窓口となり、副部長、事務局で検討してインターハイの時に実施することにした。

実際にインターハイの折にこのアンケートを実施し、およそ 6 割の回答を回収することができた。さらに広くデータを集めたいと思っているので、長野県内の山岳部では可能な限りご協力をいただくべく、今準備をし、近く県内の山岳部にはアンケート用紙をお送りする手筈を調えている。ぜひご協力願いたい。一応、今回のかわらばん配信に合わせ、アンケート用紙を添付するので、他県の方でもご協力いただける顧問の方は、印刷・増し刷りの上、調査にご協力いただけるとありがたい。調査は 9 月末日くらいを目途に大西あて送っていただければ、なお幸いですが、お手数ながら郵送代はご負担ください。

集まったデータは山本先生に分析していただき、しかるべき方法、場所で公表し、高校登山部の活動に役立てたいと考えている。

## 編集子のひとりごと

◇田中さんの報告書を読でいて思ったこと。80 年から 95 年くらいにかけては、社会人山岳会はもとより、全国の高校山岳部にも、顧問にも元気があった。結構あちこちの県で高校生を連れて、また顧問自身が海外へも出ていた時代だった。研修ということで夏休みを十分に使って、教員自身も自己研鑽しそれを現場に活かすこともっと自由にできた。取り巻く環境ももっとおおらかだった。そして国際情勢も今とはずいぶん違っていた。「高校生に夢を」というのが、私の所属する信高山岳会の、そしてまた私自身のテーマであるが、その時代に即応した「夢」を紡ぎ、次へ繋ぐことで、僕自身も育てられてきた。しかるに今は・・・。感覚的ではあるが、山岳部を志す生徒は 10 年前に比べて増えているように思う。今、「山岳文化」を若い世代に繋げるために私たち高校教師にできることは何か？そんなことをみんなで考えられないだろうか？

◇17 日から 19 日まで富山県で行われた日山協のジュニア登山教室のお手伝いをしてきた。関東圏中心に集まった小 2 から中 2 までの 39 名が 3 泊 4 日のプログラムで「山」を総合的に学ぶプログラム。立山砂防カルデラ博物館での研修、登山研修所でのクライミング、室堂から 4 コースに分かれての登山など。登山では、小生は奥大日岳へと登った。生憎眺望は利かなかったが、8 人の子どもたちとともに花の山旅を楽しんだ。（大西）